

「ヨーロッパ市民社会と辺境／マイノリティに関する歴史的研究」 《バルセローナ・国際ワークショップ》について

立石 博高

本研究（科学研究費補助金 基盤研究（A））の目的は、近代ヨーロッパにおける市民社会の形成そのものが「辺境」と「マイノリティ」の創出メカニズムを孕んでいたことを個別的・歴史的に解明することにある。そして、国民国家形成プロセスのなかに現れるそうした個々の事象の比較史的検討を行なうために、2005年度以来、ヨーロッパ諸地域の研究者との研究交流（国際ワークショップ）を重ねてきた。本年度は、数度の準備会を踏まえて2007年11月20日にスペイン・バルセローナ市のバルセローナ大学地歴学部近現代史研究科との共同で、さらに11月22日にはポンペウ・ファブラ大学ジャウマ・ピセンス・ビベス歴史研究所との共同で国際ワークショップを行なった。バルセローナを研究交流の場として設定したのは、バルセローナを州都とするカタルーニャ自治州は、スペイン国内でスペイン語とは異なるカタルーニャ語を地域固有言語としており、この地域における地域ナショナリズムの動きは、スペイン国家内部における周縁・マイノリティ問題の表出として歴史的にきわめて重要であったからに他ならない。なお、両ワークショップとも共通言語として英語を使用した。以下、日本語訳で論題を紹介

しておきたい。

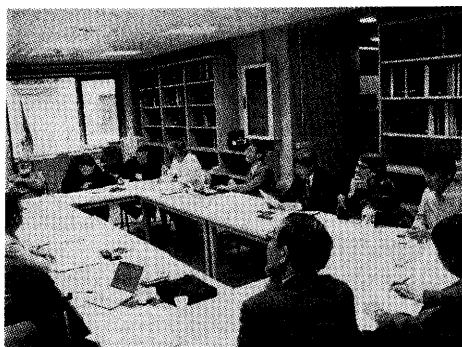
まずバルセローナ大学ワークショップでは、共通テーマに「外国史研究」を掲げて、それぞれの地域・国家が、外国史研究をどのような問題関心のもとに進めているかを確認し、そうした研究が市民社会形成の問題にどのように関わっているかを相互に検討しあった。報告は、本研究プロジェクトからは金井光太郎「アメリカ革命と初期共和国におけるナショナリズムとシティズンシップ」、鈴木義一「民主主義か権威主義体制か——ペレストロイカ時代についての論争の再検討」、そしてバルセローナ大学側からは、ヒロシ・タカハシ「二つの王政復古——スペイン（カタルーニャ）と日本の国民国家の確立」、ジュゼップ・リュイス・アライ「バルセローナ大学のチベット・中央アジア実地調査プロジェクト」であった。個別報告のそれぞれについてのバルセローナ大学および本研究プロジェクトメンバーのコメントのあとに、ピクトル・ガビンの司会のもとに自由に質疑応答を行なったが、我われのプロジェクトにとってはとくに、カタルーニャというスペイン国家内の周辺地域が、その経済的先進性を背景にしていかに市民社会を早期に展開したか、そして市民社会的基

盤をもとに外国史研究をいかに進展させたかを
 知ることができ、大変に有意義であった。さら
 にカタルーニャという地域において実際に多言
 語・多文化的空間が実現されていること、しか
 しながらその中にも少なからず社会的・人種の
 諸問題が存在することも知ることができ、国民
 国家領域だけではなく、自治州という地域領域
 のなかにも潜む市民社会と辺境／マイノリティ
 問題の重要性を認識することができた。

次いでポンペウ・ファブラ大学ワークショッ
 プでは、共通論題として「〈市民社会〉、〈シテ
 ィズンシップ〉、〈ネーション〉の形成」を掲げた
 が、報告自体は我われのメンバーによる3本と
 した。そして、ポンペウ・ファブラ大学研究者
 からそれぞれの報告に対する詳細なコメントを
 いただき、比較史的視座の重要性を相互に確認
 した。報告は、千葉敏之「ゲッティンゲンから
 ベルリンへ——普遍史から国民／地方史への
 移行における中世市民権」、篠原琢「市民社会の
 基盤としての共同体自治——19 世紀ボヘミア

における地方自治と国民文化の構築」、そして鈴
 木茂「シティズンシップの変容——ブラジルに
 おける黒人運動の30 年間」であった。それぞれ
 の報告には、ウセライ・ダ・カル、ジャウマ・
 トラス、フアン・カルロス・ガラバリアがコメ
 ントを行ない、司会ウセライ・ダ・カルのもと
 に、自由な質疑応答を行なった。ポンペウ・フ
 ァブラ大学ワークショップでも、バルセローナ
 大学でのワークショップと同様に、国民国家ス
 ペインのなかで独自の地域であるカタルーニャ
 の研究者たちから、国家領域をアプリオリに設
 定しない立場にたったさまざまなコメント・批
 評をいただいて、我われの研究プロジェクトの
 今後の進め方にとって大変に有益な示唆を得た。

なお、本研究プロジェクトは、今後も研究会
 を積み重ねた上で、2008 年度秋に研究成果を論
 文集『国民国家と市民』（仮題）として山川出版
 社より刊行の予定である。



バルセローナ大学



ポンペウ・ファブラ大学

(たていし ひろたか・東京外国語大学)